

【アニメーションの作戦】（物語を出てきた順に組み立てよう。）

A わたしは感激で胸がいっぱいになり、しかし、どう口をきいたものやら思案がつかぬままひと言、「ああルンちゃんよくきたね・・・」続いていいたいことがあとからあとから、数珠つなぎになって出かかった。チャオチー。跳ね魚、貝殻、チャー・・・だが、それらは何かがせきとめられたように、頭の中を駆け巡るだけで、口からは出なかった。

B 船はひたすら前進した。兩岸の緑の山々は黄昏の中で薄墨色に変わり、次々と船尾に消えた。わたしといっしょに窓辺にもたれて暮れてゆく外の景色を眺めていたホルンが、ふと問いかけた。「叔父さん、僕たちいつ帰ってくるの」「だってシュイションが僕に家へ遊びに来て」「大きな黒い目を見はって彼はじっと考え込んでいた。

C おしくも正月は過ぎてルントウは家へ帰らなければならなかった。別れがつかなくて私は声を挙げて泣いた。ルントウも台所の隅に隠れて嫌がって泣いていたが、とうとう父親につれてゆかれた。

D 古い家はますます遠くなり、故郷の山や水もますます遠くなる。だが、名残惜しい気はしない。自分の周りに高い壁があつて、その中に自分だけ取り残されたように気が滅入るだけである。

E 厳しい寒さの中を二千里の果てから、別れて二十年にもなる故郷へわたしは、帰った。もう、真冬の候であった。

F 母は機嫌よかつたが、さすがにやるせない表情は隠しきれなかつた。わたしを座らせ、休ませ茶などついであくれなどして、すぐ、引越しの話は持ち出さない。だが、とうとう引越しの話になつた。

G 彼は突つ立つたままだつた。喜びと寂しさの色が顔に現れた。唇が動いたが、声にはならなかつた。最後に、恭しい態度に変わつてはつきり、こういつた。「だんな様！・・・」

H このとき突然、私の脳裏に不思議な画面が繰り広げられた・・・紺碧の空に丸い月が懸かっている。その下は海辺の砂地で、見渡すかぎり緑のすいかが植わっている。その真ん中に十一、二歳の少年が、銀の首輪をつるし、鉄の刺す又を手にして立っている。

I まどろみかけた私の目に海辺の広い緑の砂地が浮かんでくる。その上の紺碧の空には金色の丸い月が懸かっている。思うに希望とは、もともとあるものともいえぬし、ないものともいえない。それは地上の道のようなものである。

J 明るる日の朝早く、わたしはわが家の表門にたつた。屋根には一面に枯れ草のやれ茎がありからの風になびいて、この古い家が持ち主を変えるほかなかつた理由を説き明かし顔である。

K 「まあまあ、こんなに頑張って、ひげをこんなに生やして。」不意に甲高い声が響いた私の前には頬骨の出た、唇の薄い、五十がらみの女が立っていた。

L 彼が出ていったあと、母と私は彼の境遇を思つてため息をついた。

M ある寒い日の午後、わたしは食後の茶でくつろいでいた。表に人の気配がしたので振り向いてみた。

N それからルントウね、あれが、しきりに会いたがつていましたよ。おまえがつくおよその日取りは知らせておいたから、今に来るかもしれない。あの連中、また来ている道具をかうという口実でその辺にあるものを勝手に持つてゆくのだ。